桐生工

「古豪復活」

めざせ甲子園 桐生工球児!!

PICK UP

津久井夢羽（2年＝遊撃手）

藤田理叶（2年＝右翼手）

津久井は5番ショートの攻守の要。藤田はリードオフマンとして攻撃のスイッチを入れていく。津久井は「全員でつないで、得点を奪っていきたい」とチーム打撃を徹底する。

バッテリー

飯島幸太郎（2年＝投手）　加藤琥大郎（1年＝捕手）

エース飯島は、130キロ弱の威力あるストレートを軸にタフに投げ抜く絶対的存在。加藤は堅実なリードと強肩でエースを支えていく。今季の桐生工は飯島、加藤のバッテリーで高みを狙っていく。

過去4度の甲子園出場実績を誇る古豪 今秋東毛リーグ4連勝で秋シード権獲得

過去4度の甲子園出場実績を持つ古豪・桐生工。球都・桐生で確固たる結果を残してきたチームは、今春から新たな指導体制となり、新風が吹き込んでいる。

■各大会で強豪相手に真っ向勝負

球都桐生の繁栄を支えてきた古豪だ。1946年夏に甲子園初出場を決めると、1960年までに春夏計4度の甲子園出場を成し遂げた。1952年の選抜ではベスト8に進出するなど、その名を全国にとどろかせた。2021年夏の1回戦では桐生第一と対戦し2対2と接戦を演じた。だが、雨天再試合となり4対9で屈した。過去20年は夏4回戦が最高位となっているが、強豪相手に真っ向勝負を演じてきた。今夏は1回戦で伊勢崎商と対戦し、エース八木原叶真（3年＝引退）が粘りのピッチングをみせていった。守備陣の奮闘もあり、7回までスコアレスの緊迫した投手戦の状況下、1対2で惜敗となったが、選手たちは完全燃焼で“最後の夏”を終えた。

■大きな可能性を秘める選手たち

桐生工は2025年度まで塩尻昌千監督が率いていたが、年度末で勇退となった（総監督に就任）。チームを任されたのは、2024年からコーチを務めてきた前新田暁指揮官の内田昇監督だ。新田暁時代には少人数チームの選手を育て上げて、公立強豪や私学から金星を奪ってきた。投手育成に加えて、選手の長所を伸ばす指導に定評があり、桐生工という伝統校での指導機会が巡ってきた。内田監督は「桐工という伝統校を任せてもらったことを光栄に感じている。塩尻前監督からの学びと、自分が新田暁で積み上げてきたことを融合させることで、選手の力を伸ばしていきたい。コツコツと努力できる選手たちが集まってきていて、大きな可能性を秘めている」と生徒に寄り添う。

■エース飯島を軸に守備から攻撃へ

新チームは徳江碧海主将（2年＝二塁手）と、エース飯島幸太郎（2年＝投手）が軸となった。投手力が計算できる一方で、打線は未成熟。夏休み中は逆方向への打撃練習を徹底。右打者のフリー打撃では、ライト方面にだけ守備員を配置し、引きつけるバッティングに集中した。秋県大会のシードを決める東毛リーグでは、桐生に勝利するなど3連勝でブロック1位通過。決勝トーナメント準決勝でも太田東に競り勝って決勝へ進出。桐生第一に敗れたが、堂々の準優勝で秋シード権を手中にした。徳江主将は「シード権獲得は励みになるが、ここはスタート。年間を通じて成長し、夏のベスト8以上を目指していきたい」と力を込める。スター選手はいないが、全員が主役。ひたむきに努力することで、大きな結果をつかんでいく。

桐生工業高校

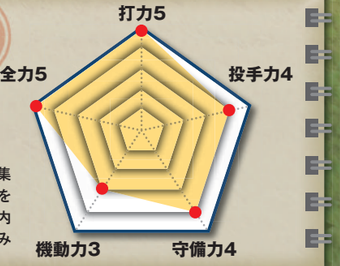
【住所】群馬県桐生市西久方町1丁目1-41
【創立】1934年　【甲子園歴】春2回・夏2回
桐生市にある伝統工業校。機械科、建設科の創造技術科などの専門分野を学ぶ。野球部は1946年夏の初甲子園出場を皮切りに1960年までに春夏計4度の甲子園出場。

主将のチーム分析

徳江碧海 主将
（2年＝二塁手）

どんなことも全力で取り組む

「専用グラウンドや室内など練習環境が整っていて、練習に集中できる環境です。チームとしては投手を中心に守備でリズムをつくり、単打でつないでいく戦いを目指しています。グラウンド内外でどんなことにも全力で取り組み、チーム全員で勝利をつかみたいと思います」



桐生工・内田昇監督

同じイメージを共有していく

「桐生工に来て3年目になりますが、球都・桐生の生徒を中心として野球が大好きな選手たちがコツコツと努力しているチームだと感じています。生徒たちとコミュニケーションを図りながら、同じイメージを共有して部員全員で戦っていきたいと考えています」

1985年群馬県生まれ。館林商工―文教大。玉村で5年、新田暁で11年間指導。新田暁の監督時代は公立強豪や私学に勝利するなど金星を挙げた。2024年に桐生工に着任しコーチ。2026年春から監督となった。